

全評、古歌餘響

山亭對月

ちりの世を遠くはなれし宿なれば月もすゝしくすみわたる哉

曉杜鵑

後藤一雄

松影に夜をはのこして有明の月にきえゆく山ほととぎす

雜報

◎卒業生諸兄と送る

我同學百六十の諸兄今將に業を卒へて我龍南を去りなんとす、吾人何の言を以てか諸兄を送りまづらん、離歌を歌うて悲しきをいふは吾人の欲せざるどころ。思ふに國家多事、人心日に荒み、流俗相率ひて輕佻浮華、上は衣冠の人より下は走卒の輩に至るまで滔々として皆此渦中に沈む、心に廻瀾を期し、胸に經綸を抱くもの、天下幾何かある。大學は人材の淵藪にして、悉く是濟濟たる多士、天下の木鐸を以て任ずるもの、然る

を、聞く、人一たびこゝに入れば忽ち前日の面目なく、氣弛み心衰へ、少壯の氣去りて悉くかの凡俗となり畢んぬべし、と、吾人固より此言を信せずと雖、希くは今まで諸兄が龍南にありて、吾人を訓誨誘導し給ひしが如く、尙益卓落たる慷慨の心を以て、洛陽の士人を風靡し、刮目見るべきものあらざめよ。平生の厚誼に馴れて言語頗る禮を失ひ、先進に對するの道を飲げり、されど笑ふて吾人の言を嘉させ給はば、幸福何物か是に加へん。別に臨みて情盡さずと雖、言ひ能はず。時下酷暑に向はんとす、幸に自愛せられんことを希ふ。

◎休暇來る

鳥兎匆匆、本學年も終となりぬ、避暑休暇の來る將に旬日を出でざらんとはす、

滔々流れて止まざるは水、まかも自ら注ぐ所あり、無限の乾坤に蜉蝣の一生を寄す、歲月は逝き逝きて底止するところを知らず、人はまかも、必らず其命運に於て到達すべき所あり、之を一生にしては死、之を一年にしては除夜、學年の終期も亦之に外ならず、一年の日子、三百六十五日、之を世界の命數より起算せば、九牛の一毛も啻ならずといへども、一歳又一歳、積めば紅顔も鬢髻と化する日あり、

短期なる一生と雖、吾人は未だ其半に及ばず、日夜孜孜として修むる所は、高潔純一の心性、深遠奧妙の學理、經國濟民の藝術にあるのみ、未だ社會の大波中に身を投じたるにあらず、學途嶮なりと雖、未だ人情反覆の社會に較ぶべくもあらず、さりながら、今、學年の終期に及び、過去の溟霧中に髣髴たる一年間の事を思へば、亦多少の感慨なくんばあらず、三百有餘日、夢の間に將に終えんとし、經來れる千山萬嶽も、半は記憶の裡を去りぬ、あはれ、亦一生思ひ起さることもあ

るべし、痛く吾人が腦中に印せる事も、唯吾人が行路日記の一片紙を埋むるに止るのみ、恰も草葉の露をそばつ萬里の旅客が、千山を攀ち、萬嶽を越え、野を行き、河を渡りて、碧空に峙つ高山の絶巔に到らんとして、遙かに過ぎ來し方を顧望し、漠々たる雲烟の中に夢の如き山河村落を瞻る想なくんばあらず、

旅行者の行路を案ずるは巔に於てすべし、吾人が來學年の方向を思ふも、亦來學年の首途に於てせしめよ、而して吾人をして、先づ來路を顧望せしめよ、避暑休暇は眼前に在り、思ふにわが六百の同胞諸君は、此好機を以て故郷を省せんとすらん、これ最も可なり、世に故郷はど、遊士の心を惹くものやはある、風に思ひ、雨に思ひ、花に慕ひ、月に慕ふは、なべての心なり、こは心の弱く、故郷をのみ頼ればにや、あらず、あらず、昔は萍蹤蓬跡、身を雲水に托しぬる人の枕有懷郷涙と孤懷を漏せし夕もありけり、榮華の夢醒めて、明石浦に身の薄命を嘆ちける人の、『月上雲井の物語りせよ』と哀情を歌ひし夜もありけり、さればこはなべて世の人の心にぞありける、何

故に之かく故郷の思はるゝぞ、双親の在せばにもあらず、朋友の住めばにもあらず、唯何となく慕はしきは、山にもあらず、河にもあらず、過ぎ來し方の追懷なり、鳥飛ぶに倦みて還るを知る、自然の景物自ら然り、故郷は過去の想念の集注するところ、おはれ希くは、故郷の懷に眠り、舊故の温情に飽き、過去を悔恨懺悔するを得せしめよ『老驥伏櫪志在千里、烈士暮年壯心不止』、壯心止まざるが故に悔恨す、悔恨するは過去の成功より、更に大なる希望の吾人が未來に輝けばなり、近時學生の風儀日に非なり、嗚呼吾人をして一大省し、過去を悔恨懺悔せしめよ、是れ寧ろ吾人が願なり、人は満足に死えて希望に生くとはいはずや、吾人は信ず、悔恨懺悔の裡には、希望の光未來に向て嚇々たるものあるを、吾人が今日の感は是なり、

◎柔道紅白勝負（部員〇、T生投）

維時明治三十年五月廿四日柔道紅白勝負を瑞邦館に行ふ、是れ柔道部員にして今七月將に卒業せんとする諸氏を送る爲めなりき、午後二時半

の撃拆を以て瑞邦館に來り會する者佐久間教授園助教授を始めとし中島寺本諸先生其他生徒合して二百名余を以て數ふ、三點鐘に至り開會す、先づ委員友枝君起ちて開會の主旨を演べて曰、此度我部員にして將に七月を以て卒業せんとする者四十有餘名、或は補充時代本部創立の時より拮据勉勵よく野口喜入諸先輩を助けて後輩を誘導せられ、或は尋中より來りて盡勉せられ、共に我部の隆盛に力を致したるは吾人の深く感謝する所なり、此度諸君の卒業や諸君の爲めには賀す可しと云へども、我柔道部より考ふれば、有爲熱心なる諸先輩を取り去られ實に痛傷に堪へざるなり、左れを吾人豈區々婦女子の嘆をなさんや、吾人は諸君の前途を祝せざる可からず、而して予の今一二年生諸君に望む所は此等有爲熱心なる先輩の去られたる後は愈互に相助け相促し、奮勵熱心斯道の研究をなし、發達を來たし、其欠を補ふのみならず、愈我部の隆盛を來たさしめ以て先輩諸君の好意に報わられん事はれなり、云々と辭簡に言足らずといへども其の中心切々の情至れりと云ふ可き、次で有働良夫君起

ちて之に答ふ片言雙語皆我部を思ひ我等後輩を誘導奨勵する言ならざるなし、實に卒業生諸君が終始一貫熱誠勉勵を以て斯道の發達を計り、斯くの如く隆盛を見るに至りしは實に諸君の力與りて多きに居ると云ふ可し、赫熱金を鎔かし、嚴霜指を隕す如きも以て諸君の志を奪ふに足らず愈力め愈勵み今や業を卒へて遠く中原に出でんとす、吾人久しく其の訓導誘奨を承けたる者焉ど满腔の熱情を以て諸君の恩に報ひざらんや焉ど其の行を壯にせざらんや、諸君や去て復來らずとも諸君の名と諸君の績は長く止て吾人後輩の腦裡を去らざる可し、諸君去て後、吾人力微に行足らずといへども幸に先輩の尾に附して熱心誠意我能ふ所を盡くして斯道の愈隆盛ならん事を力め諸君の望を失せざらん事を期し以て諸君高恩の萬一に報ひんと欲す、諸君幸に意を安んせよ、

今當日の勝負の主なる者に付き聊か左に冗評を試みんか、

第一回上塚君と佐藤君何れ上下はなけれども上塚君の方少しは勝りて覺えし、上塚君の立ち行

25	1.15	2.30	2.15	2.m	5.15	2.30	.15	.15		30	2.45	1m	3.15	1m50															
掃腰	四方圍	足掃	釣込腰	咽絞	小外掃	膝車	釣込腰	膝車	不明	大外刈	釣込腰	左袈裟圍	右足掃	四方圍															
山本直枝	山崎直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝	山本直枝															
敵すべきにあらざれど	富氏出で向ふ、元より	水泡に歸しつ、次で納	ざるなかりしもあはれ	は推し、或は絞め、盡さ	或は撃ち、或は組み、或	の事あらんと勇往奮進	して起ち、敵とて何程	二回には清家氏奮然と	深川氏に絞らる、第十	亦多力と云へど容易く	まし、白組の中村氏元	て立向ひたる様いと勇	知られたる剛力無双の	事もなし第十一回に至	り隼人組に其人ありと	深川氏悠然微笑を含み	て立向ひたる様いと勇	まし、白組の中村氏元	亦多力と云へど容易く	二回には清家氏奮然と	深川氏に絞らる、第十	して起ち、敵とて何程	の事あらんと勇往奮進	或は撃ち、或は組み、或	は推し、或は絞め、盡さ	ざるなかりしもあはれ	水泡に歸しつ、次で納	富氏出で向ふ、元より	敵すべきにあらざれど

7.20	4.55	2.20	2.11	2.40	3.15	2.11	17m	2.30	3.11	7.11	1.05	2.11	1.05						
四方固	四方固	巴投	抑込	腰投返	咽絞	押込	咽絞	過勞中止	休落	巴投	膝車	掃腰	袈裟固						
鈴木一熊	大野一衛	福地周二郎	福地周二郎	於保庫一	鍋島資高	富米野蕭	鍋嶋資高	久保蕭	米原弘	古川高次	中島琢磨	中嶋琢磨	櫻井浪之助	平田全祐	石川清人	石川清人	山崎清人	内野淺二郎	石川清人

屈せず撓まずあわや一剎那に敵の首かゝんとせまも能はず、力盡きて仆さる、善哉々々、第十四回の戦には流石の深川君も疲れて投手も見事に行かず遂に山本君をえて堅子の名を成さしめぬ、されど『エトナー』『エトナー』以て能く左攻右撃見事敵三人迄打取りたるは感服力は山を抜ぐべく氣は世を敵ふべし只尙『業』に精練を積まんことを望まざけれ、第十六回山崎君体軀元より大なり之に敵せるは小兵の石川君其の体の働き頗るよく巧に敵を引廻し遂に袈裟固にて勝、次で

11.55 掃腰 北嶋一弘吉 第十七回に至り又内野君を見事掃腰に掛けぬ
 2.35 巴投 北嶋哲郎 第十八回平田君紅組より出づ、君は新進中にありて中々の勉強家、
 .30 足掃 國廣剛毅 近頃其進歩も頗る著し
 .20 足掃 國廣高彦 如し、今石川君と相
 5. 体落 松原常興 對す、實に好敵手なり、
 2.15 足掃 富田常直 石川君元來体のさばきよくして業も達せる故
 I. 負傷中止 富田直 掃腰にて屢平田君を仆
 さんとせり、左れを既に三人目の事とて遂に膝車にて敗らる、石川君体小なれど今愈勵み玉はば大に造詣する所あらん乞ふ勉めよ、第十九回平田君既に石川君には勝てりと雖も新敵は其名著き中嶋琢君体の保ち工合と云ひ、業の掛け工合と云ひ、頗る善く到底平田君の敵すべきにあらず、左れと平田君よく保ちて多く譲らざりしは感服、第二十回中嶋君と櫻井君体には余り優勢を見されど中嶋君の体余程『坐り』よく尤も其宜しきを得たり、之に反えて櫻井君は其体兎角

『浮き』過ぎて業掛くるにも『せき込む』なきか、身を軽くし體を浮かまむるは所謂『波にた』よふうつる舟哉』の如く其の妙を得れば尤も善けれど、往々泛虚に過ぎ調子に乗せられ易し、故に又自衛沈體とて構への固きこと城郭の如く、腰を据へる事は盤石の如くなるべきをも、併せ勉めざる可からず、要は只其の宜しきを制するにあれば、平生稽古の間注意せられなば得る所あらんか、君も老予が老婆心に一考を賜らば幸甚、第二十一回古川君は業の黠より云へば元より中嶋君の堪能なるに及ぶべくもあらず、左れど勝負とては力もあり容易に仆れず、中嶋君よく之を制せんとせしも遂に過勞の爲め中止となれり、中嶋君何ぞ勇を鼓えて戦はざりしか、死を決して戦ふは武士の本領、剛毅以て難に當り、耐忍以て久しきに堪へんとするは武道の目的なり、『勝負とは引きしほりたる梓弓放ても尚放てもなほ』、勝敗は兵家の常なり、殊に柔道稽古の目的は區々たる一二勝敗にあらず、勝つ可きに勝ち、敗る可きに破る、是れ其當のみ、勝つりとして誇るに足らず、敗れたりとして耻づべきにあらず、負けなば男らしく負くべき、何を意とするに足らん、君幸に予の意を了せよ、第二十二回古川君と米原君よくも相似たる者かな、甲撃乙搏更に勝敗なし、相持する事十七分余遂に引合となれり兩者とも更に『手』出でず今其何故なるかを考へ平生の稽古に於て鑑むる所あらば大に得る所あらんも、米原君の脊負投將に功を奏せんとしたる事幾度なるを知らず、其奏効せざる蓋之腰の入れ様足らざる如し、脊負投は腰を充分に入れざれば可ならず、左りとして又多きに過ぐれば却て壓下さるゝ恐あれば、よく意を用ひざる可からず、君之を勉めよ、古川君も脊負投を掛けんせしも元より彼の如き風にては到底奏功すべくも思はれず勵み玉へ々々、第二十三回紅組にては講道館生久保止君出で白組よりは富米野君出づ、久保君は前きには北嶋君に勝ちて勇名挙げし程なれば、態度といひ、投業といひ、中々得られたる處あれど敵は名に負ふ富米野君體の坐りよく、勝負には慣れ、中々の巧者なれば頗る、勁敵なり、久保君得意の捨身の功を奏せざりしは、元より富米野君の姿勢の適せざるに由

る多からんも、君少しく氣臆したるにはあらずりしか『心をば廣く大きく強く持ち鋭氣みちみち先取るぞかし』君果して予が言に首肯するや否や、其は兎に角君の毎度出席なさるゝは委員諸君に代りて深く生等の感謝する所なり、第二十四回富米野君と鍋嶋君、共に新進者中の鏘々たる者、富米野君の巧者なると鍋嶋君の堪能なる、更に相譲らず、抑へられては起き、起きては抑へ、双龍の相搏する如く遂には鍋嶋君抑込みにて勝、第二十六回福地君鍋嶋君に次ぎて出づ決然、悠然、亂麻を斷つゝの慨あり、其の業のさばき頗るよく、加之力も強く於保君を腰投返にて敗りたるは感服の外なし、次で第二十七回には小川君と福地君なり、前度の勝負には小川君見事足掃にて福地君を敗りしが、此度の戦中々左る譯に行かず、福地君勵みしか小川君怠りしか遂に抑込まれて小川君の敗となる、残念、第二十八回には剛毅不屈を以て聞えある竹添君、泰然として出で已れ紅組の若輩片端より一人残らず『引き付け』て一泡吹かせ近頃の一興にせん者と掛られし所誠に勇ましかりし、之に向ふ福地

君劣れりとはあざざる可げれど、取組むや否や早や飛んで數間の外に投出されたり、是れ竹添君巴投掛けたるなりけり、實に喝采を博しき、第廿九回竹添君得意の引付け屢々到り、大野君遂に抑込まれ、敵する能はずして手を拍つゝ止むを得ざるに至れり、第三十回鈴木君と云へば剛力無双と稱せらるゝ程の者、一は力と体を以て勝り一は氣と力を以て優る、竹添君屢々『引付け』を爲さんとせしも鈴木君の大なる体には行はるべくもあらず、左れど竹添君獅子奮進の勢にて不屈不撓縱橫奮撃疾風雷雨凄しども云はん方なし『氣當りは健雷や日本武不動多門の勢ひと知れ』と實に竹添君の事をや云ふならし、左れど平生の稽古に余り力過ぐれば業は兎角後れ勝ちとなり勞しても余り功なき事となりはせずや、希くは予の爲め一者を煩せ、第卅一回北嶋君は新手の勇者、竹添君はよしや剛力なりとても、數度の戦に幾分元氣疲れし者の如く業も出でず、例の『引付け』も掛からず、敵なる北嶋君は此處一番奮勵の處と勇を鼓し氣を勵ぞ投業、腰業などあびせ掛けに掛くれども、竹添君は頑ど

して動かす先づ敵の勢を待つに逸を以てせんとする如し、左れど北嶋君より腰業にて七分を取られしときは君の胸中忽然噴起して之を回復せんと勉めし如くなるも大勢之を挽回するに由なくあはれ獅子王も掃腰にて仆れぬ、第卅二回北嶋君既に竹添君に勝てりと云へど、兩虎争へば共に全からずとある如くいたく疲れ玉ひしにや後輩の澁谷君をして堅子の名を爲さしめつ、第卅三回國廣君と云へば昨年十一月の戦には『旭將軍』と謠はれし其名も高さ勇將なれば到底澁谷君の敵とも覺えず、例の得意の足掃にて見事勝ちぬ、第卅四回國廣君又足掃にて勝、第卅五回國廣君須臾の間敵二人迄取りて悠然敵を待つ處に、出で來れるは男の中の男、雲宵を衝くの慨ある中嶋章君にぞありける、拍手喝采鳴りも止まず、君は廿八年十一月の初陣以來數度の合戦に一合もみにくき戦なさぬのみか常に敵の大將五人三人打取りて天晴勇士と謠はれつ殊に去ぬる四月中國勢と野球試合には古今獨歩の大功名なし舞鶴の天地を震撼せし者なれば、觀る者誰れか之を喝采して迎へざる者あらんや、左れど國

廣君も亦一方の驍將優に中嶋君の敵たるに足る果して何れか勝つ『虎躍風起龍怒雲生』の活劇既に觀者の眼前に髣髴たる如かりし、然るを何事ぞ、取組むや國廣君既に見事敵の足掃に掛けられて仆れたるを見る、實に疾雷耳を敵ふに違あらざりし、是れ元より中嶋君の掛業の見事なるにも由るべけれど、亦國廣君の油断せしと見しは僻目か、敢て問ふ如何、第卅六回中嶋君既に敵の先鋒を一戦して取り長驅京を衝かんとする時に當り、現はれ來れるは敵待ち顔の松原君、之を逆へ撃ち、奮戦撃搏、術を極め、力をつくし、頗る力めたり、左れど中嶋君も鼓勇奮勵敢て遜色なま、想ひ回らせば昨年五月十一月兩度の戦に松原君裏投抑込にて中嶋君を敗れるあり、今や亦時相似て人亦相對す、兩君胸中果して如何、遂に松原君体落にて勝つ、或人觀て曰く是れ中嶋君業、力の劣れるにあらざりして益し氣欠ぐるの致すところか非か、君や体、業、力元より達したるありと雖吾人の最も君に惜む所は『息のあがる』事にして功を一簣に欠ぐの憂ありと君此言を如何にみる然れども是の事や平素勉むる所あらば

以て其弊を矯むるに足らんか、第卅七回白組の裨將中嶋君既に松原君の敗る所となりまかば、大將軍富田君泰然追らず徐ろに立ちて敵に向ふ實に勇まじき武者振なり、前きに悠々生のひきし術歌『敵ことは獅子奮進に怒るとも吾身やわらに心鐵壁』富田君を評して至れり盡せりといふ可し、潜龍躍生掌流星閃發握麴魅魍魎皆逃避の概あり懸待進退の度は生等未熟者の云々すべきにあらず只感服の外なし左れと松原君も剛の者容易に敗れず左れと遂に足掃にて負く、第卅八回紅白二組裨將以下皆仆れ残れる只兩軍の大將のみ、先づ起れるは喝采の聲拍手の響。白の大將軍富田君は松原君を敗りて優然敵を待つ、紅組の大將軍は吉田君既に敵を眼中に置ける如く出で玉ふ、一は敏捷を以て優り一は体勢を以て秀づ、恰も獐獅猛虎相争ふ如し、實に受け虚を衝き懸るに苟もせず、待つに欠ぐる所なき、懸けては返し、返しては懸け、吉田君の体落も到底出すに由なく富田君の左腰又容易にかゝらず、忽視る富田君見事敵を引き付け吉田君の体は既に富田君の手中にありて富田君正に手を引き、吉田

君もあはや一瞬の中に打ち碎かれん一刹那、手の引きの足らざりしか、敵の妙を得たるか、吉田君翻然として兩足に立つ、其の業の達せると氣の至れると自然の妙を得玉ふとや云はん、富田君の脊負投劣りしにあらずや、吉田君の受け優りしなり、誰れか是を見て感嘆の聲を發せざらんや、實に斯くの如きは近來嘗て見ざりし處蓋々當日の最優とす、既にして吉田君体落にて亦富田君を仆さんとし富田君過て負傷す、由りて止むを得ず中止となれり、吾人は此兩雄雌雄を決するに至らざりしを深く以て憾とす、もし夫れ事の詳細に至りては吾等未熟者の容易に云々すべからざる者なれば予は只委員の瀆囑に由り當日の景況一斑を記すのみ妄評多罪尙當日平日の勉勵と勝負の成績に由り昇級されたる人名左の如し

五級甲へ

竹添 一熊

澁谷 哲郎

鈴木 四郎

五級乙へ

於保 庫一

福地周二郎

中嶋 琢磨

深川 靜

鍋島 資高

富米野 蕭

小川 一磨

古川 高次

櫻井浪之助

宮國千代吉

六級甲へ

堀見 末子	鷹取篤三郎	納富 陳平
大西虎二郎	杉町 驕一	坂卷 登助
内藤 啓三	江藤 久喜	佐藤雄之助
内野淺二郎	山崎 暢	樺島 益三
飯塚 孝眞	岡澤卷太郎	

六級乙へ

川本 眞樹	松尾 勘六	土屋 忠治
上塚 周平	藤田 明	川内 宗八
山崎 幹夫	宮内 勝治	厨 豊
小野田泰助	江崎 眞澄	佐伯吉三郎
西田 精		

◎本學年最終の號を

發刊するに臨みて

謹て諸君に告ぐ、曩に生等謬て諸君の推す所となり、任を我部に承くるや、當時竊に期すらく、吾部々長の誘掖と諸君の補翼と、併せて前任委員諸氏の計畫宜を得て、本誌の進運目を刮すべきものあり、又生等が革新に手を下すべきものを見ず、始め務めて從來の方針を保ち其昧裁を守り行かば、經驗自ら知見となり、改善の道心に通じ来るなさを保せずと、任に當り三號を重ねるに至りしも、時日切迫し、又試験の眼前にある

あり、加ふるに生等の不才を以てす、材料編輯意に滿たざるもの多く、責に對して轉た慚愧を増すのミ、然れども、功名に急に、空想に驅られ、輕舉事を取るは蒙鳩の愚、生等が斷じて可なるを知らざる所なり、生等希望を將來に置き、吾誌の爲に微力を致さんとす、夫れ縦論横議は生等が能くするところにあらず、天を詠じ人を謠ふも亦生等が能くする所にあらず、然れども、生等既に我誌に許すに犬馬の勞を以てす、願くは諸君が筐中の雄篇鉅作を別判し、校風の進暢に微力を致すを得ん、諸君幸に過去三卷の不備を咎むるなく、七十餘日の休暇に滿腔の熱誠を筆端に上せ、梧桐戦ぐの候、之を吾誌上に煥發し、生等をして空責の譏を受けしむる事勿れ、



◎演說部報 (六月四日)

腰間三尺の劍銃なりといへども之を以て人を斬らば其所爲蠻たるを免れず。文士三寸の筆巧なりといへども之を以て人を服せんとする尙迂なるを免れず。ひとり不爛の舌以て天下を唱ふべく以て萬人を罵倒すべし。我演說會の設ある蓋

し偶然にあらず。而して此必要あり此設立あるを見ながらかたわら冷視し去り甚しきは六百の健兒中僅に一百有無の聽衆を出すは何ぞや。吾人あまりに諸子が無責任無顧着なるを慨せずんばあらず。演説部の例會は六月四日午後七時を以て開かれたり。元來當日は五時開會の筈なりしも時鐘六點を報じて尙一人の來會者なく彼と過ぎ是と移りて漸く七時を以て開かれたり。吾人は筆を叱して當日の聽衆雲の如く殆立錫の餘地なしと録せんと欲するも能はず。無慮總計百を以て數ふとは何事ぞや。劈頭第一壇に登れるものは誰ぞ。久保の義虎君其人なり。氏は天下歸一なる標題の下に論破して曰く國家は一の有機体にして他の有機体の如く精神と形体とを有す而して國家は其の分子たる各個人の意志によりて導かるゝものに去て他の有機体の如く漸次進歩するものなり。進歩は其要歸一に歸す。乞ふ西史を見よ。破竹の勢を以て東西洋の大部を席捲したる歴山大王が偉業はマセドンを代表して凡ての國を歸一せんとの念に出づるにあらずや。而してはローマ國王が地中海濱に跋扈したるが如

き又は中世紀にて法王と帝王が相競ひて天下を歸一せんと計りしが如き近くはナポレオンが三世相繼ひて其威を逞ふしたる如き皆天下國家を歸一せんとするの意に出づるものなり。されど論者或は云はん。此等の偉人士は何故に能く其破天荒の偉業を奏功するを得ざりや乎と此理極めて明白なり。彼の歴山大王は其征服せし凡ての土地を通じて同一の法律習慣に従はしめんとせしにあらずや。ローマ帝國が敗れしも亦此理に外ならず。法王及帝王は之に反して各自をして其好む所に従はしめたるより管理あまねからず遂に一敗するに至れり。又ナポレオンは中央集權を旨とし各自をして佛國風に化せしめんとせしよりわはれ非命に仆れしにあらずや。以上の例を以て見れば統一は事實に於て非なるも理論に於て是なり、今や各國盛を競ひて早晚歸一の業なるなきを保せず。諸子願はくは此覺悟あれと説終りて壇を下る氏が辯は流暢と云ふよりも寧ろ爽快なりといふべし未だ長せりと云ふに足らぬと切磋商年を経る意りなくは造詣する處あらん。次に登壇せしは容貌洒落たる千手正澄

君其人なり。氏は劈頭古人と今人との優劣を較し今人は學術其他の點に於て古人にまさること萬々なるも可惜精神上に於て一等を古人に輸せるは疑ふべからず。今の青年は専ら文に拘泥して經術に重を置かず。今の人は伶俐なり。射利的なり。勝手なり。見よ我校習學寮中些末なる校規を厭ひて勝手に出寮するものゝ如何に多きよ。又通學生中嘆すべきの惡風に墮落きて無責任に放浪するものゝ如何に多きよ。是れ必竟學生間に養徳の觀念少なきに起因するものにして此の如き有様にては日本の將來も思ひやらるゝなりと論結し。高低自在能く論辯の法を得たるも氏が辯は宣教師的に傾き語の自在にして感慨深き割合には思想に乏しげなるは遺憾。第三席は福地虎夫君なり氏先づ口を開きて曰く予は學生なり如何に明説を吐くも諸子は予を學生視して予の言に重を置かざるべし故に今予は古人の力をかかりて諸子を説服すべしと夫より本題に入りて先づ本邦詩文の沿革を説き一轉して詩と散文との比較に及び次で今人か古詩人に劣れる理由として次の三條を掲げたり一は必要的に古人を

摸するより劣れりと云ひ、一は言語の變化より生し、一は智識の變化より出づるを説き。夫より詩人の義務に入り詩人は *Lawgiver* なり詩人は *God* なるにも拘はらず今の詩人なるものは如何と斷じて降壇すたくみに西句を引き泰西詩人の姓名を臚列する極めて妙テニソンの詩を攻撃す蓋し氣焰萬丈と云ひつべし。要するに氏は材料に富むも未だ論辯の術に長せず。願はくは今少し泰然とかまへ込むべし。

次は黒木千尋先生其人なり人生の目的てふ演題を掲げ給ひ、一瀉千里の辯を以て徐に説き起し給ふ様、人誰か目的なからんされど此目的は如何なるものなるぞたとへ慈善をなすが如きは善の目的に相達なきが如きも此等は手段にして目的にわらず、高尚なる手段に達せんとするの踏台なり、此の如く漸次登り行きて遂に方便とすべからざるの目的に達す之を *The highest end* と云ふ今之を考究せんとするに臨み歴史上三期に分つ、太古グリーキ人は専ら此最上善を講せり夫より中世紀に至れば凡ての人は *Virtue* を講究するに至り更に近世に至れば權利義務を以て

目的とするに至れり。とてこれより中近世の事は措きてグリーキ學者に説及ぼし當詩の學者は二派に分れて一は快樂主義を旨とし一は死肉主義を唱へたり此後アリストートル時代後に至りては又二派ありて相争へり即ち一は絶對的に感覺を尊ひ一は Reason を旨とせり以上の二説は人生の目的を盡せるが如きもなほ一面を盡して全局に及ばず故に吾人は全般に適する目的を撰ばざるべからず此に近きは Aristotle の幸福説なり。この Reason と Desire との合同即ち Virtue 是なり。されど惜哉アリストートルは此合同の方即ち Personality を欠けり。今假に富を以て最上善とするも富は吾人ありて始めて必要あるものなるを如何せん。各譽を以て最上善とするも吾人は畢生名譽の爲に生存するものならざるを如何せん。進化論者は生命を保つを最上善とすめれど吾人は常に進歩的の者なるを如何せん。要するに吾人は Progressive nature に適するもの即ち Self-realization を撰ばざるべからず。之をなすには腦を十分に用ゐて働かざるべからず凡て働の裏面には快樂ありと説き終に人生には利已

利他の二主義あり。人は此二を併用して其一のみ馳すべからず若し此二にして衝突することあらん乎。吾人は智力によりて斷せざるべからずと結びて降壇せらる。當日熱心なる諸教授職員は一人も來會なかりしに先生一騎兩を衝ひて來駕せられしは吾人の感謝して措かざる所也。次は前總務委員有働良夫君其人なり。氏は例の愛嬌顔を無理に收めてシヤにかまへ徐ろに説起して曰く世が文明になりゆくまゝに團結の必要生ず而して團結をなすには黨與心を基とす故に團結の弊を述べんとすれば黨與心の弊を擧ぐれば足る。夫れ黨與心は依頼心を生ず。依頼心は無責任を生ず。見よや青年目下團結の有様は如何。各縣人は各縣の團結即ち舊各藩下の團結をなせり。固より團結は必要なるには相違なければ之に伴ふ弊害を生ずるを如何せん。是れ必竟各自の眼孔があまりに狭小なるに起因せずんばならずと此他二三の所感を述ぶる筈なりしも時間經過の爲中止して壇を下れり

次に出でたるは端艇部の岩佐正雄君なり。氏は端艇部の過去現在未來なる演題の下に端艇部擴

張に直間接の必要あるを説き更に本校端艇部の沿革に説入れり其要は初め明治廿一年四艘の短艇を作りて漸に艇庫を書湖畔に設けたり其後廿三年我校長崎行軍の擧あるや醫學部に於て双方撰手の競漕をなきて大敗せり。可惜廿四年此等の短艇は賣却せられて今や大村中學にあり其後廿七年に至りて雜誌部委員再設の計畫をなし、もならず。廿八年六月現存の短艇を造ることとなり越えて翌年一月四日當地に回漕せり以上を過去の有様として目下の形勢益有望なり。されど今や端艇は朽ちて見るに堪へず。之を擴張せんとするも未だ龍南會の一部とならざるを如何せんと結びて降壇す

最終は我校海事熱心者の隨一なる吉田久太郎君なり氏は端艇擴張一件の專斷的に過ぎたるを謝し夫より擴張の順序を説起して曰く設計は大概二千圓の豫算なり。此財源の事に關しては大に痛心し苦慮の末先づ贊成を求めしは生徒の父兄諸氏なり。されど之のみにては到底十分ならざるを知り更に九州の各舊藩主諸氏に應分の寄附を仰ぐ事とせり。時恰も我校長上京中に際した

れば其斡旋を委囑えたるに其結果大に有望なるを認むるに至り細川侯の如きは率先して一件を嘉納せられたりと次に氏は這般佐世保に行きて自ら鎮守府より短艇二艘を貰ひ受くる事となりたるを報告し其他歸途長崎にて各短艇を見聞えたる餘話を演じ畢りて下壇す時已に時鐘十點を報し迅雷暴雨耳朶を穿つこと頻なり即ち委員は立ちて閉會を告げ茶菓を喫して嬉々快語す
録し畢りて自ら記事の無責任なるに自失せずんばわらず諸子請ふ之を怨せよ。(櫻月報)

◎中川學校長の演説

過般上京せられて高等學校長會議に列し、教育界の現況及び一般の社會の趨勢を視察して數日前無事歸校せられたる我校長には、六月七日午前十一時教員生徒一同を瑞邦館に集め、一場の演説をなされたり。先づ戰勝後の餘勢として我國實業の勃興したることより説き起され「外見上國運の進足著えきが如くなれど、裏面より觀れば心ある者をして憂鬱せしむる事一にして足らず。各種の事業を起す者少からずと雖も、眞に

國利の進捗を計るの意に出でたるは甚だ稀に、各自私益を營み、汲々として錙銖毫厘の末利を争ひ、互に排擠陥穽して天下大勢の何者たるを解するの識なし。其弊や社會全体を誘ひて之を腐敗せしめ、人心日に輕薄に、風俗月に華奢に流れ、學生の風儀も其影響を受けて敗類するに至りぬ。』と概し、『諸子は此險惡なる風潮の下に立つて之に動かさるゝことなく、確乎として進まざる可らず、諸子は此腐敗せる空氣に感染せざる様勉めざるべからず。』と吾人の本分を示され進んで我校の特長を挙げ、『益々之を發輝して日本學生の模範と仰がれ、標準と推さるゝ様一層奮發する所なかる可らず。』と勵ま、校長の在京中、龍南同窓會に臨まれしが、其席に於ても本校出身の學生は、大學に於ても五高の特風を維持すべきよし望まれしを言ひ、『他校出身の大學生は料理店などに高會するに引かへ、獨り龍南同窓會は質素に、儉約に、寺院に開くが習ひ、此度は上野の韻松亭に於てせり。』と誇られ、話頭一轉、近頃欠席者増加したり、若し放逸に傾きたりとすれば、恐るべき兆候にあらずや』と注意せら

れ。『修學上不便のことあらば遠慮なく申出らるるは差支なけれど、斯る不勉強の形跡を止めざる様諸子相戒めて我言を實行あらむを希望す。』とて滿場肅たる間に壇を降られたり。

織屋も拂はずんば五嶽將に成り、濁水も停めずんば四海將に盈んとす。今この針砭を賜はる、吾人豈に刻心鑠骨服膺せずして可ならんや。

◎又々恨事

吾人前號に於て、中川教授令兄の薨去と、古賀三郎氏の死を悼み、今又茲に恨事を記す、ああ、我筆折らんか、燒かんか、陰雲月を呑んで龍南風な玄時に虫を聞く。我第二期卒業生理學士下村成典氏病を臺灣に得て、五日郷里久留米に逝く、氏夙に圖南の志あり、拓殖務省に出で、久々く蕃地にあり、而して中道にして此の如し、遺憾淋漓言ふに忍びざるなり、謹で吊す。(六月十一日夜)

悶々

●吾人已に我校風は、變移の時代にありて、一定の道に在らざる事をいへり。併之是或は、花郷に

あれば、花の麗はしきを覺えざるが如きか。

○ともかくも九月よりは工學部の新校友を得んとす、而してこの工學部は、我校を出づれば、直に社交の中に入るものなれば、其氣風が所謂ジミテ、書生肌がなくなり、以て更に我校の氣風に影響を及ぼす事なき事なしと信ずるは杞憂か。

○果して然らば、今變移まつゝあるもの、又更に或方向によりて變移を來すべきは、燎々として火を睹るよりも明かなり、憂ひて慮らざるべけんや。

○是を以て我輩茲に制爲誘導の會團を、起すべき必要を説くの、悲しむべきを知ると雖、止むを得ざらしむるものあるなり。

○而して其會團は、學校の制裁と一致して、重厚に、正確に、信實に、只我校の士氣の振作を期せん事を要す。

○而して吾人は、希くは此一欄によりて、聊か其道の裨補たらんことを期す、諸兄幸に吾人の微衷を察して聲援の榮を賜へ、諸兄の大氣焔は歡迎して止まざるなり。

●人あり、曰く、演說部の氣焔少しも昂らず、時

に教育家、宗教家の知名に請うて其快辯を聞く又よからずや、と、然り蓋し來學年となりて涼氣人に逼まるの候に至らば、必ず人目を聳動せしむべきものあるべしと信す。

●眞個に學風を樹立せしむれば、萬事足る、自ら率ゐて此根本に培ふべきなり。

●雜誌部亦氣焔なま、氣焔とは徒に豪傑の口眞似にわらず、只其抱負精神と其得たる學徳とを朋友に隱さるることなり。

◎近事片々

久後元長先生 今度助教となりて龍南に來任せらる、先生は東京の人なり、久しく造士館に教鞭を執られ、夙に獨逸會話文典に精通せられたりと聞けり、龍南の子弟今後先生により大に面目を新にするものあらん。

●學年試験 の日割揭示せらる、卒業生は十六日より二十二日、一二年生は二十二日より廿九日まで、目下戰鬪準備に忙かはし、本號印行成るは方に電光石火刀戟相交るの頃なるべきか。

小崎弘道氏 九州の北部を巡教中なる同氏は六月十一日本校を參觀したり。

硯友會 六月一日九品寺の一室を借りて例會を開く、會するもの十有七名、兼題の詠草積んで餘に及ぶ、會長稼堂先生一々これに朱點を加へて、いと懇に批評し玉ひ、また即題二三を出して詠せしめ玉ふ、了て先生、例に由て作歌の心得に就き、諄々教示し玉ひ、日暮愛を割いて散會す、當日の和歌は載せて文苑欄にあり。本會は來學年更に新會員を募集し、益規模を大にし、且つ先生に請ふて毎週詩歌の講義を聽くに至るべし

(幹事報)

柔道教師 岡野圓治先生辭職上京せんとするを以て柔道部員諸氏は本月十六日本校前に於て紀念のため一同撮影して贈られたり。先生は千葉の人、夙に嘉納先生の講道館に學んで講道十年、明治二十七年九州に來り爾來龍南の子弟を教ふ温厚篤實にして皆其の徳を思ふ今將に去らんとす、吾人は柔道部の爲のみにあらずして我校の爲に之を悲む。

◎投書 一 東

◎團結は必要なり。朋黨は危之。吾人は動もすれば世人が團結を口にして其實朋黨に陥り易きを憂ふ。

◎今日の成文幾百千條は漢高の法三章に及ばず要するに法は簡なるを尙ぶ。

◎想あるものは凡て文なかるべからず。我龍南の誌は文科生のみ獨占的貨物にあらず。ひとりあやしむ第二部三部生の投書少なきは何ぞや。

◎肝癢もたまには其效を奏することあるもあまりに過多なれば半文の價値なし。偶には起すべき肝癢を抑へて辛抱するも亦一の肝癢にあらずや。

◎墮落したるらしき學生に墮落したるは少なく墮落しそふにも見えぬ儕輩に墮落の徒多きは何ぞや。近時いかにも此傾向あるにはあらざる乎。

◎運動に熱心なるはいかにも嘉すべき事なれど爲に貴重なる學課を犠牲に供するはあまりにいかゞわえき話ならずや。世にはかゝる輩も

ありけるよ。

◎ 信書の秘密は極めて重大なり。中には緊要極秘の音信もあらんに適當の保管なき生徒控所に晒し置くとはいかにも危険千萬ならずや。

(櫻月法士)

◎ 本校閱覽室の書籍多くは本校教員諸君の借用となりて生徒の不便を感せしことは嘗て本誌の雜報欄内に見えし所なりしが近頃また往々かゝる不便に接するもの多しかくは閱覽室設置の目的に反するものと云ふべし宜しく當局者の一顧を乞はん、

◎ 新に閱覽室に納めらるゝ書籍は時々本誌に掲載せらるゝを以て大に吾輩に便益なりといへども是れ數月間のものを一時に掲載するにあらざるを以て未だ充分の便宜を得る能はざるは吾等の憾みとする所なり吾等は今後本校閱覽室に書籍到着の都度該室内に掲示せられんことを希望に堪へざるなり又教員借用の書名をも併せて揭示せられれば大に便宜なるべし、

◎ 書籍購入の事は學校の職權内にあるを以て吾等の容喙すべき限りにあらずといへども限り

ある金を以て可成有用の書籍を購入せざるべからざるは勿論又一方に於ては出來得るだけ生徒の便宜を計らざるべからざるを以て毎年購入せらるゝ書籍に關しても亦這般の注意を要せられたきなり即ち閱覽室内に投書函を設けて生徒の希望書籍名を投書せしめこれを參考として購入書籍を撰擇せられんこと希望に堪へざるなり。(以上三件希望生投)

◎ 寄贈書冊

反省雜誌十二年第五號

反省雜誌社

青山評論第七十七號

青山評論社

華陽第六號

岐阜縣尋中華湯會

教育時論第四百卅七號

教育時論社

櫻花園第二號

東京麹町研學會

今般始めて寄贈せらる今日の日新世紀(天眼)、曾國藩の人物及封事(中西牛郎)、尙武逸話(金波樓)など頗る見るべきもの。

獨逸語學階梯案内

著者 賀來教授

これは我賀來教授の編纂になりて南江堂より出

版したるものにて、先生が嚮に上梓したる獨逸語階梯に由て、研究者の便に供せんが爲、邦文獨譯、讀例の註釋、文字排置法、階梯所載の獨語和解、和獨字彙、の五篇に分ちて丁寧親切に講述せられたるもの、藏して我雜誌部文庫にあり

國民新聞

國民新聞社

江湖文學第七號

江湖文學社

校友會雜誌六十七號

第一高、校友會

帝國文學第六

帝國文學會

明治會叢誌第九十七號

麻布明治會

我育時論第四百三十八號

開發社

九州史談會報第一號

九州史談會

材料豊富、印刷鮮明、百有二頁の大冊子、論說あり、考證あり、雜錄あり、雜報あり、内田教授が熊本學風の歴史的觀察の如きは、議論明滅にして利刃の物を斷つが如し師範學校教諭福原氏が西域美術輸入時代の實蹟の如きは、引證該博にして間に挿畫を入れて一讀して我朝美術の沿革を知らしむ、文久元年魯艦對馬碇泊始末は武藤教授の筆になれるもの、こは是

本年四月教授自ら其地を踏んで古老古書に據りて記されたるものなれば詳細にして明晰、とらるに吾人をして當年の對外政策に於て暗涙を催さしむ。赤間關攘夷談も師範學校教諭武藤嚴男氏が實歴談にして又當時の攘夷始末の實相を窺ふべきもの、別に附録とて肥後國諸家文書及舊記を添えたり、本號の、高本氏所藏の萬曆廿五年明主より秀吉に贈りし書翰の如きは稀代の珍書、細川忠興の書翰は以後水尾帝讓位の狀況を思はしめ、連號續載すといふ佐田文書の如き又考古の材料に有益のものなるべし、吾人は同會に望を属するもの多之、吾人は更に望屬す同會事業の一として、速にかの屢成らんとして成らざる征西將軍譜の發行を果さん事を願ふ、

六合雜誌九十八號

六合雜誌社

校友會雜誌六十七號

一高校友會

日英實業雜誌五卷十七號

京橋日英實業協會

右寄贈辱うす。夏期休暇來りて以來二ヶ月相見ゆることを得ず、只筆硯の多祥を祈る。



正 誤

◎東京龍南同窓會幹事隈本繁吉氏より前々號野
球大勝記事祝電の中、龍南同窓會打電の外、同氏
よりも發送せたる旨所載たるは事實相違にして
同氏は、同會幹事として同會を代表してなせたる
るにて其以外別に一箇人としてなしたることな
しとの正誤ありたれば茲に其疎漏を謝す。

◎擊劍大會記事中、彌富氏と吉丸。

◎近事片々、九州史談會記事、赤間關攘夷談財
滿久純。熊本城の沿革は淺井武藤及生駒新太郎。

同會規約第十三條、例會費は別に金參錢

◎前々號本會決算報告の備考中、殘額五拾七圓
貳拾參錢貳厘……残り七圓貳拾參錢貳厘

編輯者疎漏にして校正を誤る只宥恕をあふぐ。

廣 告

御承知の通り此度端艇部大擴張につ
き諸君の父兄に宛て寄附募集の書狀
差出置申候處未だ回答なき分も有之
設計實行上甚困難を感じ候間此際至
急何分の御通知下さるゝ様父兄へ御
通牒被下度希上候

六月十二日

端艇部擴張發起者

生徒諸君

許
六

是を是とするは諂へるにちかし。

非を非とするは謗るにちかし。